

媒介する言葉と路地の夢：  
中上健次とフランツ・ファノン

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 英理 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009367">https://doi.org/10.14945/00009367</a>

# 媒介する言葉と路地の夢 ——中上健次とフランツ・ファノン

渡 邊 英 理

## 1、「真の人間主義」——人文学と大学

その最晩年に、中上健次は熊野大学という企てを始めた。「卒業は死ぬとき」を合言葉に、いわゆる「市民大学」として開かれた熊野大学は、現在も形や質をかえながら、夏季特別セミナーを活動の中心として続けられている。その始まりである一九九〇年六月三日に行われた熊野大学の開校式に、中上は「真の人間主義」という一文を著し、寄せている。

世界は危機に遭遇している。私たちの総てが破滅に向かっている。地球が破壊しかかっている。この危機や破壊や壊滅の中に私たち、人間、共に生きてきた愛する動物、植物、この風、この空、土、水、光が永久に閉ざされ続けるのか。何かが大きく間違っていたのだ、近代と共に蔓延した科学盲信、いや近代そのものの盲信がこの大きな錯誤を導いたのだ。

私たちはここに霊地熊野から真の人間主義を提唱する。(中略)人間は自由であり、平等であり、愛の器である。霊地熊野は真の人間を生み、育て、慈しみを与えてくれる所である。熊野の光。熊野の水、熊野の風。岩に耳よせ声を聞こう。たぶの木のをそぎ語る柱古の物語を聞こう。そこに熊野大学が誕生する<sup>1</sup>。

かならずしも明示的ではないが、中上が謳う「真の人間主義」には、ファノンが唱えた「真の人間主義」への共鳴を聞き取ることができる。中上のファノンに対する言及は、さほど多くはない。しかし、「暴力」をめぐる書かれた初

---

<sup>1</sup> 一九九〇年六月三日 熊野大学の開校式への文章、引用は中上健次『エッセイ撰集 青春・ボーダー篇』、四四一頁

期エッセイには、すでにファノンの名前が現れている。たとえば、「郷里（暴力）の意味 文学ノート二」（一九六九年）<sup>ii</sup>には、「暴力」というモチーフとともに、ファノンの名前が刻印されている。「郷里は僕にとって暴力だ、何度新宮に向けて汽車に乗り、何度朝のホームにおりようと、僕にとって現実の新宮は真の郷里ではなく郷里のヌケガラにすぎない。僕のイメージの中核にすわっているカスガ共同体もノダ共同体もいまは崩壊しているのに、僕はリビドーのようにあの新宮、あの春日、あのノダに帰りたいと思っているのだ」。「いかにして僕は喪ったものをとりもどすのか？時をいかにしてみつけるか？ユリシーズのようにか？あるいは具体的な暴力そのものに自己を投機したファノンのようにか？」<sup>iii</sup>。

「現実の新宮は真の郷里ではなく郷里のヌケガラにすぎない」。なぜなら、「カスガ共同体もノダ共同体もいまは崩壊している」からだ。「僕」は、「あの新宮、あの春日、あのノダに帰りたい」と願ってやまない。初期中上における「暴力」とは、このように「郷里」と強く結びついている。だが、より正確に言えば、その「郷里」の「中核」には「カスガ共同体」と「ノダ共同体」があり、「郷里」とは、和歌山県新宮市の被差別部落としての路地である。その意味で、「暴力」は、初期中上においても、「路地」との紐帯の中で思考された。そして、そのとき、小説家の口をついて出たのが、ファノンの名前なのだった。

一九二五年、西インド諸島のカリブ海の仏領マルティニーク生まれのフランツ・ファノン。「黒い皮膚」を持つ黒人、ファノンは、精神分析医であると同時に、革命家として生きた。第二次世界大戦時、ファノンは自ら志願しフランス軍へ参加し、戦後はフランスのリヨンで精神医学を学ぶ。一九五三年には、当時、フランスの植民地であったアルジェリアの病院に医師として赴任し、アルジェリア革命がおきると、FLN（民族解放戦線）をひそかに支援し、五六年、病院の職を辞して国外へと脱出、FLNの活動へと身を投じていく。第三世界の脱植民地化を目指すファノンは、「西洋近代」の「人間」とは異なる、新しい「人間」を模索しようとした。すなわち、「西洋近代」の「人間主義」——植民地主義の暴力を伴う亜種の「普遍」とも言うべき「人間主義」とは別種の「真の人間主義」。それこそが、ファノンが目指す「真の人間主義」なのだった。

「世界」の「壊滅」や「地球」の「破壊」。その「危機」に警鐘を鳴らし、「動物、植物、この風、この空、土、水、光」など、あらゆる自然の福音をこそ歡

---

<sup>ii</sup> 初出『さんで—ジャーナル』一九六九年四月六日

<sup>iii</sup> 中上 前掲書、四二五～四二六頁

び、それらとともに生きる人間を中上は謳う。教会の権威と神中心の世界観から離脱をはかる人間中心主義。それが、ヨーロッパの文芸復興期における人間主義であった。それに対し、中上の「真の人間主義」は、近代批判とエコクリティシズムの色彩を帯びる。だが、「人間は自由であり、平等であり、愛の器である」という部分には、ファノンとの共鳴を聞き取るべきである。ここでのファノンとは、植民地主義の「暴力」を伴う「西洋」の「人間主義」を亜種の「普遍」と批判し、それとは別種の「真の人間主義」を構想した者のことである。故郷である和歌山県新宮市の被差別部落を路地と仮構し、路地をめぐって小説の言葉を紡ぎ続けた中上において、「人間」の「自由」と「平等」には、差別の超克が自ずと含意されている。その意味で、ファノンが、植民地主義の暴力を伴う亜種の「普遍」たる「西洋」の「人間主義」とは別種の「真の人間主義」を構想したのと同じく、中上もまた、差別という暴力を伴わない「真の人間主義」を希求したものと思われる。そして、その「真の人間主義」を、一生の時間をかけて学び続ける場を、中上は、熊野大学と名付けた。ここには、語本来の意味での人文学の意義を見ることが出来る。ヨーロッパに大学という存在が誕生してからしばらく、人文学とは、法学や医学などの「実学」から独立した批判的知性の総称であった<sup>iv</sup>。それは、こう言ってよければ、現世的な利害や「実用性」の引力の影響を受けやすい「実学」に対して然るべき節度と倫理をうながす「良心」としての位置とも言える。それゆえ、人文学は、大学に必須かつ独自の意義を長く有していたと言ってもよい。ヨーロッパで誕生した大学は、「実学」を牽制する批判的知性としての役割を与えられた人文学の根拠地のひとつなのだった。

さらに、いわゆる「実学」が想定している「実用性」とは異なる、人文学が有する「有用性」の価値を提起した者もいる。二〇〇三年に、この世を去った比較文学者／思想家、エドワード・サイードの名前は、人文学の思想的価値の提起者の一人として、この世界に長く記憶されるだろう。『人文学と批評の使命——デモクラシーのために』の中で、サイードは、こう言っている。

自由と教養というこの理想に結びついた人文主義（ヒューマニズム）の理想はいまも、虐げられた人々に、たとえば不正な戦争や軍事支配に抵抗

---

<sup>iv</sup> ヨーロッパの大学における人文学の意義や役割については、吉見俊哉『大学とは何か』（岩波書店 2011年）に詳しい。

し、独裁と暴虐を打ち破ろうと立ち向かう力を与えている。いずれも、現に有用で生きた思想として胸を打つ<sup>v</sup>。

差別を伴う亜種の「普遍」と言うべき「人間主義」とは別種の「真の人間主義」。中上の言う「真の人間主義」は、サイドが言う人文学——「不正な戦争や軍事支配に抵抗し、独裁と暴虐を打ち破ろうと立ち向かう力」という意味で「有用で生きた思想」である人文学へと通じている。この人文学の使命を担おうとする意思そのものにおいて、熊野大学は、その始発に、紛うことなき真なる大学として、この世界に生み落とされたのだった。

## 2、「解放」の夢——「炎」と「橋」

こうしたファノンの影響を、中上は、創作においても見事に結実させている。その実りのひとつに、短編連作集『熊野集』の一篇「石橋」をあげることができだろう<sup>vi</sup>。ファノンの思想実践の中上の継承と変容。小説「石橋」にはその複数的な痕跡が、刻まれている。

小説「石橋」は、『熊野集』連作六番目にあたる。語り手／書き手は、生身の作家中上健次と相似形の小説家である「私」である。「石橋」の物語世界は、中上の故郷、和歌山県新宮市の被差別部落を仮構した路地を主たる舞台におく。その路地は、いま、「同和行政」の「開発」によって解体されつつある。「宿酔いのまま私は削り残った山を見つめた」。山とは、臥竜山とも長山／永山とも呼ばれた、路地の裏山のことである。繰り返される「開発」のたびに掘削されてきた裏山は、「同和行政」の「開発」が路地／被差別部落に及ぶに至り、最終的に削り取られてしまうことになったのだった。わずかに「削り残った山」だけとなった路地は、いま、解体の最終局面を迎えている。小説家である「私」は、路地の若衆たちを「カメラマン」に、解体される路地を記録するべく映画を撮影している。その小説家である「私」の、さまざまなる思念が、小説「石橋」では吐露され綴られていく。

こうした体裁において、小説「石橋」は、一見、「身辺雑記」的な趣を持って

---

<sup>v</sup> エドワード・W・サイド『人文学と批評の使命——デモクラシーのために』（村山敏勝・三宅敦子訳、岩波書店、二〇〇六年）／Edward W. Said “Humanism and Democratic Criticism” (Columbia Themes in Philosophy).

<sup>vi</sup> 「石橋」は、連作短編集『熊野集』第六番目にあたる。初出は、『群像』一九八〇年十一月号。引用は、『中上健次全集5』。

いる。しかしながら、その構造は複雑に入り組んでおり、そこには、路地をめぐる思想が凝縮され、さまざまな文学的挑戦が企てられている。

喪われた「郷里」を、小説家は、いかに取り戻すのか。ここでの「郷里」は、路地と考えてよい。先に触れた初期エッセイの中では、次のように書かれていた。「いかにして僕は喪ったものを取りもどすのか？時をいかにしてみつけるか？ユリシーズのようにか？あるいは具体的な暴力そのものに自己を投機したファノンのようにか？」。

アイルランドの作家、ジェームス・ジョイスの長編小説『ユリシーズ』。かつてジョイスは、「たとえダブリンが滅んでも、『ユリシーズ』があれば再現できる」と語った。「私ハ「熊野集」ニ路地ガイヨイヨ取り壊サレルトイウノデ、コトサラ路地ノ動キヲ書キ留メテイタ」（「鴉」『熊野集』）とも述べられる『熊野集』とは、まずもって、ジョイスにとっての『ユリシーズ』のように書かれた小説群だと言える。

もう何年前だろうか、紀州熊野の路地のアバラ屋を一軒占領し、寝泊まりして小説を書いていた頃だった。（中略）そのアバラ屋でもっぱら「熊野集」という短編連作を書いていたので、その歌を耳にしたのは、苦い味のする小説、読み辛く分かり難い小説の代表のような「熊野集」の短編を書きながらだったが、地を這うように、つぶやくように歌い続けるカッチャンの歌は、小説家の私にとんでもない連想を強いる。平たく言えば下手な歌にかき乱され原稿書きがピタッと止っているのだが、耳から入ってくる歌で、さながらジェームス・ジョイスの「ユリシーズ」の主人公になってアバラ屋によこたわっている気になってくるのだ<sup>vii</sup>。

「たとえダブリンが滅んでも、『ユリシーズ』があれば再現できる」。そのジョイスのひそみに倣って、路地のすべてを書き尽くす。そう、たとえ路地がなくなっても、『熊野集』さえあれば、再現できるというように。そのような意気込みで書かれた小説。それが連作短編集『熊野集』の言葉である。とりわけ生身の作家、中上健次と相似形である「私」を視点人物とする小節群には、路地の解体のさまざまな局面が描き出され、路地の歴史、その意味が問い直さ

---

<sup>vii</sup> 「ダメ男、ここに極まる」初出『流行通信』一九八五年五月号／『エッセイ撰集 青春・ボーダー篇』、383～384頁

れている。そのなかで、小説「石橋」は、初期エッセイにあるように、一方で「ユリシーズのように」あり、他方で、「ファノンのように」ある思想文学の言葉だと言えるだろう。

小説「石橋」におけるファノン。それはまず、次のような場面に立ち現れる。

高校を卒業して都会に出て丁度ジャズの流行の時代だった事もあって日  
がな一日ジャズを聴いて暮らした時も路地は私の頭の中にはたえずあった  
し、ブラックパンサーの運動やラテンアメリカやアフリカの動きを伝える  
「世界革命運動情報」を定期的に読みもし、フランツ・ファノンをさがし出  
して読みもしたが、それでも路地を見い出していたわけではなかった。た  
だ私は、次々と起こる若い左翼の動きの周囲にいて、火焰瓶で燃え上がる  
炎を視ながら路地とそれを二重写しにして架空の市街戦を思い描くだけだ  
った。路地から武器を持って飛び出した者らは駅の踏み切りに火焰瓶を投  
げて交通をまひさせ、三重県境になった橋を爆破し、さらに和歌山方向と本  
宮方面にのびる道路を破壊しバリケードをきずく。帰郷した折り架空の後  
先を考えない市街戦だけのために下調べに行った事さえあった。その時、  
私が苦しんだのはその後先の事ではなく路地が都会で思い描くのと違って  
絶望するほど人々は無気力で、元気がないという事であり、他所の者の  
眼には劣等意識と映るほど自分の考えを言わず他人とのこすれ合いを警戒  
して生きているという事だった<sup>viii</sup>。

「高校を卒業して東京に出て丁度ジャズの流行の時代」。一九六五年二月、中  
上は、高校卒業を待たずに故郷・和歌山県新宮市を離れ、大学受験を名目に東  
京で暮らし始めた<sup>ix</sup>。一九六〇年代後半、時あたかも政治の季節である。「私」  
(中上)は、「次々と起こる若い左翼の動きの周囲にいて」、「火焰瓶で燃え上がる  
炎」を視ていた。上京後の中上は、早稲田予備校に入学するものの、授業には  
ほとんど行かず、親や姉からの仕送りを受けながら、新宿で「フーテン生活」  
に身を投じ、新宿歌舞伎町のジャズ・ビレッジに通い詰めていたことが知られ  
ている。一九六五年六月、中上は、ベトナム反戦デモに初めて参加、翌一九六  
七年には、「十一月十二日の第二次羽田闘争以降、王子野戦病院反対闘争、成田空

<sup>viii</sup> 「石橋」、二八三頁。

<sup>ix</sup> 以下の中上健次の作家的略歴に関する記述は、主に高澤秀次『中上健次事典——論考と取材日録』恒文社21、二〇〇二年による。また、引用は、『中上健次辞典』三一四～三一六頁。

港反対闘争等のデモに参加」、また、新宿の「ジャズ・ビレッジの仲間たちと新宿反戦直接行動委員会を組織し、「新宿スパルタクス団」と署名したパンフレットを発行、独自に学習会を開く」などする。「次々と起こる若い左翼の動きの周囲にいて」とは、こうした生身の作家の体験を反映したものでしょう。

ここで回想される政治の季節は、「燃え上がる炎」の記憶において中心化されている。それは紛れもなく、その時代の異議申し立ての手段として用いられた対抗暴力、直接暴力の「炎」である。「ブラックパンサーの運動」や「ファンツ・ファノン」をさがし出して読みもした」。そう小説家が言及するように、先進国の政治の季節は、ファンツやブラックパンサー等の「暴力の哲学」の影響下で大きな波を作り出した。そして、ここでの「私」は、ファンツを、路地／被差別部落に結びつけ、その「炎」を転火しようとしたと言ってよい。「火焰瓶で燃え上がる炎を視ながら」、「私」(中上)は、路地／被差別部落での「架空の市街戦」を思い描いた。「路地から武器を持って飛び出した者らは駅の踏み切りに火焰瓶を投げて交通をまひさせ、三重県境になった橋を爆破し、さらに和歌山方向と本宮方面にのびる道路を破壊しバリケードをきずく」。「炎」に燃える「橋」。「具体的な暴力そのものに自己を投機したファンツ」にとってのアルジェリア独立戦争のように、「私」(中上)は、路地での「架空の市街戦」を幻視したのだった。当時、小説家は、いまだ路地を見出していなかったと言う。しかしながら、いまだ見出されていなかった路地を、小説家は、すでにして暴力と出会わせ、路地における「暴力の哲学」を胚胎させたとも言えるだろう。

そして、このような場面——路地と暴力の出会いの場面を幻視する小説「石橋」とは、思想文学としての性質を帯びる。いわば、「路地」の「暴力の哲学」をめぐる思想文学。その思想文学は、ファンツ、そして、ブラックパンサーを媒介として紡がれている。小説「石橋」は、その名の通り、此処と彼処を結ぶ「橋」をモチーフとし、そこでは、複数的な媒介行為が遂行される。たとえば、六〇年代後半、「私」が、ファンツの「炎」(対抗暴力)を媒介に路地の「炎」(「架空の市街戦」)を幻視したというように。小説家にとって、路地の姿は、ファンツを媒介にしてこそ見出された。それから十五年ほど経た小説の現在、やはり小説家は、ファンツを通じて、路地を見ることになるだろう。現在の路地を対照する媒介としてのファンツ。だが、その中心は、もはや「炎」ではなく「橋」にある。小説「石橋」は、たとえば、次のようなファンツの「橋」を通して、現在の路地を描き出そうとするだろう。



ひとつの橋の建設がもしそこに働く人びとの意識を豊かにしないものならば、橋は建設されぬがよい、市民は従前どおり、泳ぐか渡し船に乗るかして、川を渡っていればよい。橋は、空から降って湧くものであってはならない、社会は全景にデウス・エクス・マキーナによって押しつけられるものであってはならない。そうではなくて、市民の筋肉と頭脳とから生まれるべきものなのだ。なるほどおそらくは技師や建築家が必要になるだろう——それもときには一人残らず外人であるかもしれない。だがその場合も党の地区委員がそこにいて、市民の砂漠のごとき頭脳のなかに技術が浸透し、この橋が細部においても全体としても市民によって考え直され、計画され、引き受けられるようにすべきなのだ。市民は、橋をわがものにせねばならない。このときはじめて、いっさいが可能となるのである<sup>x</sup>。

ここで、ファノンが語るのは、「独立」の夢というべきものである。ファノンにおいて、「独立」は、二重の意味で直に見ることが叶わぬ夢であった。アルジェリアの独立運動に自らを投機したファノンは、独立戦争の最中、一九六一年十二月、この世を去る。アルジェリアが悲願とも言うべき独立を果たしたのは、ファノンの死後、一九六二年七月五日のことであった。また、生誕の地においても、ファノンは、「独立」を見ることは叶わなかった。ファノンの故郷、仏領マルティニークは、一九四六年にフランスの海外県となり、旧仏領の植民地が独立を果たしていく中でも、本国に対して従属的な、その位置を抜け出すことはなかった。

自分の目で見ることが叶わなかった「独立」の夢。植民地主義からの「解放」の理想。その夢や理想を、「橋」の建設に仮託し、ファノンは語った。ファノン曰く、「ひとつの橋の建設」は「技師や建築家」によって先導されるにしても、「市民の砂漠のごとき頭脳のなかに技術が浸透し、この橋が細部においても全体としても市民によって考え直され、計画され、引き受けられるようにすべきなのだ」。「橋」は、「市民の筋肉と頭脳とから生まれるべきもの」であり、「市民は、橋をわがものにせねばならない」。

このように、夢の言葉とと言うべきファノンの至言において、「橋」の建設は、独立国家樹立の喩として現象していた。しかしながら、小説「石橋」において、

---

<sup>x</sup> フランツ・ファノン『地に呪われた者』（鈴木道彦、浦野依子訳、みすず書房、一九六九年）一一三～一一四頁。

いま現在の路地を見舞うのは、その「橋」の建設そのものとも言うべき出来事である。

「同和行政」の「開発」で、みるまに路地は更地とされて、スーパーマーケットへ続く道へと変容される。路地はいま、彼方と此方を結ぶ「橋」(＝道路)を敷く「公共事業」(建設作業)の真っ只中にある。それは、「他所目にはスーパーマーケットだけが得をするような無理難題」に他ならず、ファンオンが理想とした「市民の筋肉と頭脳とから生まれ」ているわけではない。「スーパーマーケットが出資してつくったその山と道路をつける会社の理事の一人に私の姉婿が入っていて、山を崩し道路をつくる工事は、私の義父と義父の姪の夫が、姉婿と三人で十億とも十四億とも人の言う工事を山分ける事になっている」<sup>xi</sup>。「市民」のために働く「技師や建築家」たるべき「私」の親族たちは、「二年も前から路地の山も家も取り壊されてしまうからなのか姉夫婦は駅二つ向こうに土地造成費を入れれば一億はかるく越す家を新築して」「広い家つくって路地から離れ」て暮らし、「市民」たる路地の者たちのために働くどころか、「すでに路地の者らと気持ちはかけ離れて」しまっている。さらには、「私」の実の男親、浜村龍三さえも、この「利権」に少しでも預かろうと躍起になっている始末なのだ。『同和行政』の「開発」たる「橋」の建設。それは、「公共事業」を通じた利益配分型政治の一種であり、その利権に群がる路地の者たる小説家の親族たちに、小説は辛辣な目を向けている。

ここで路地の小説家が描くのは、両義的かつ多義的な「開発」がもたらした負の側面だと言える。「利権」に預かることができる者とできない者、その帰結としての新たな貧富の差、そしてコミュニティの破壊。『同和行政』の「開発」、それが、被差別部落に、少なからず「近代」の「平等」をもたらし、住環境や賃労働、雇用や仕事など、さまざまな面で生活改善を広く行きわたらせたことは確かである。だが同時に、その試みが、新たな貧富の差を生み出し、「コミュニティ」を破壊していった側面を有することを否定することはできないだろう。とはいえ、小説「石橋」が行うのは、「差別解消」や「弱者」や「少数者」に対する「積極措置」に対するバックラッシュの言説で見られるような、イデオロギー的暴露では、けっしてない<sup>xii</sup>。小説「石橋」は、こうした「開発」の

<sup>xi</sup> 「石橋」、二八四頁。

<sup>xii</sup> こうした点について、友常勉の次のような言葉が参考になるだろう。「六〇年代からの全国総合開発から取り残され、過疎地域を対象とした財政措置や国・県の開発計画事業に依存せざるをえない多くの地域社会にとって、経費の三分の二を国が負担または補助する同和行政は、地方自治体の財政を補完するという意義があった。一般的にいって、こうした傾向は市町村、そして運動

負の側面、「近代」の裏面とも言うべき事態を、外在的、超越的な立場で批判するのではなく、あくまで路地に内在し、身を切られ「切って血のでる」「当事者」の視点で問題化するのである。

ファノンの「橋」を下地とする小説「石橋」が描く文様には、歴史のアイロニーが漂っている。夢の言葉に映し出される現実の路地。夢の中で喩として用いられた「橋」(独立国家)の建設の表象は、現実の、事物そのものとしての「橋」(道路)の建設(公共事業)として、いま、現実化する。「橋」の建設に託された理想、夢は、路地における「橋」(道路)の建設(公共事業)において、卑小な現実へと墮している。かくして、ファノンが語る「解放」の夢や理想は、皮肉にも、現在、路地に進む「橋」の建設(開発)という形の「解放」の限界、瑕疵を浮かび上がらせることへと奉仕するだろう。

ファノンを通じて浮かび上がる路地の限界。その限界を、小説「石橋」はまた、ブラックパンサーを媒介にしても浮き彫りにする。

小説の現在、路地をとりまき、小説家が対峙している「敵対性」。それは、アルジェリアにおいて、ファノンが対決していたそれとは、もはや大きく異なっていた<sup>xiii</sup>。端的に言って、それは、「敵対性」の変質——植民地主義の暴力から資本主義の暴力へという「敵対性」の変質である。たとえば、ネグリ&ハートであれば、それを〈帝国〉との「敵対性」——暴力が抜き出しのまま遍在化する植民地主義の「敵対性」ではなく、〈帝国〉との「敵対性」と言うだろう。

小説「石橋」で、小説家である「私」(中上)は、この路地を解体せしめる力の在り処を正鵠に感知している。「地主の玉置が持っていた山と路地の土地は、市内に五つ店舗をもつ独占のスーパーマーケットが山を、市が土地を権利委譲

---

体の国に対する財政依存が深まることも意味する。しかし、太平洋ベルト地帯や拠点となる主要都市に投下される公的資金と民間資本と、「低開発地域」に対するそれらとの間に雲泥の差がある開発主義のもとでは、同和行政だけで地域社会の格差や保守的な社会構造が変わるはずがないのである。したがって「同和取りすぎ論」や反解放同盟のキャンペーンは明らかに仮想敵をつくってヘゲモニーを獲得しようとする政治戦略である。他方、同和行政に過大な期待を寄せることも、それが地域社会と運動体の民主主義を醸成するのではないかぎり、部落差別を解決するための十分な処方箋ではない。』(『戦後部落解放運動史——永統革命の行方』河出ブックス 河出書房新社 2012年 五十四頁)

<sup>xiii</sup> 植民地は、分断され、植民者が持ち込む善悪、美醜の「白黒マニ教的」な二元論の世界観に支配されている。そこでは、宗主国/植民者は、直接の暴力で支配を貫徹する。言わば、軍隊や警察のような暴力装置がつねに剥き出しのまま、力をふるっているのである。「植民地化された世界は、二つにたちきられた世界だ。その分割線、国境は、兵營と駐在所によって示される。植民地において、原住民の承認を得られる制度的対話者、コロんと抑圧体制との代弁者は、憲兵ないし兵隊である」(フランツ・ファノン『地に呪われたる者』鈴木道彦、浦野依子訳、みすず書房、一九六九年、二四～二五頁)。植民地主義では、かくも、あらわに暴力が現前し、また、日常の中に深く構造化されているのである。

されていたが、スーパーマーケットは他の大手スーパーが新宮に進出するのを恐れ、それであたり一帯が繁華街になった路地の山を更地にし、道路を整備しあらたに店舗をつくる事が必要になった。「市は、内心は一企業であるスーパーマーケットと行政の癒着だと指摘されるのをおそれたが、二十数年前、払い下げにしてやると路地の持ち家を壊させ建てた住宅が老朽化したということを理由に、建物を取り去り、そこにも駅からスーパーマーケットに抜ける道をつくり、路地の人間らには隅に新たに住宅をつくるという計画を案出したのだった。土地は玉置に巻き上げられ、さらにここに来て借地権まで巻き上げられるのだった」<sup>xiv</sup>。路地を取り巻き解体させるのは、いまや市や国などの「行政」、すなわち「公」をも手先として使う遍在化する資本の力である。それは、もはやファノンが対決したのではなく、むしろ、ブラックパンサー党が対峙した「敵対性」と近似する。

黒人解放運動を組織した政治組織、ブラックパンサー党は、一九六六年、カリフォルニア州オークランドで、ヒューイ・P・ニュートンとボビー・シールにより、都市部の貧しい黒人が居住する「ゲットー」を警官から自衛するために結成された。「黒いベレー、黒い皮ジャケットという独特の制服」に身を包み、銃を誇示した「戦闘的黒人組織」といった「戦闘集団」。それが、一般に広く流布しているブラックパンサーのイメージだろう。しかし、その実践は、酒井隆史が言うように、「ブラック・コミュニティの自律と防御」を第一とする<sup>xv</sup>。コミュニティの「自律」と「防御」は、医療や福祉など自前の制度を整え行われた。「相当数の黒人がパンサーを支持するのは、党の、あまり知られていない他の活動を尊敬するから」であった。その活動とは、「ゲットーの子どもを対象とする無料朝食給食、無料診療、麻薬追放運動など」の医療や福祉をめぐる活動であり、また、それらに加え「解放学級、地域車騎による警察管理を要求する署名運動」などの「人民奉仕」である。

---

<sup>xiv</sup> 「石橋」、二八四頁。

<sup>xv</sup> フィリップ・S・フォナー『ブラックパンサー』によると、「ブラックパンサー（黒豹）の名を選んだ由来は、豹という動物は相手が攻撃をかけてこないうちに自分から攻撃することは決してなく、攻撃されれば猛然と身を守る」と言われていたためである。その名の由来通り、ブラックパンサーにとっての「暴力」は、警察や権力の人種主義的な迫害や差別から、地域社会を守るための手段に過ぎず、「相当数の黒人がパンサーを支持するのは、党の、あまり知られていない他の活動を尊敬するから」であった。「党の、あまり知られていない他の活動」それは、本文中で触れた医療や福祉をめぐる活動や「人民奉仕」などである。なお、ブラックパンサーに関する記述は、酒井隆史『暴力の哲学』河出書房新社、二〇〇四年。「第二章 暴力と非暴力」「第三節、自己憎悪からの解放」、および、フィリップ・S・フォナー『ブラックパンサー』（河出書房新社 1996年 小田実・監訳）を主に参照した。

こうしたコミュニティの「自律」と「防御」は、反資本主義という線でも組織された。酒井によれば、ブラックパンサーのヒューイ・ニュートンは「帝国主義から〈帝国〉への移行という趨勢の分析」を荒削りながら先駆的に提出する。それは、すなわち、現在の「敵対性」は、新しい帝国主義との「敵対性」——暴力が抜き出しのまま遍在化する植民地主義の「敵対性」ではなく、〈帝国〉との「敵対性」——世界のコミュニティを網の目のように覆い、国家をも資本の手先とするような資本主義の暴力との「敵対性」だという認識である。こうした遍在化する資本の網の目に抗するべく、ブラックパンサーは、「横断的な志向」を強め、「ナショナリズム」（「民族主義」）を超越していく方向性を模索した。それは、すなわち、「黒人ゲッター」を「アメリカといういわば第一世界のなかの第三世界、先進国内部の国内植民地」と捉え、そのうえで「アメリカの黒人ゲッターにおける闘争を、国際的な民族解放闘争、反植民地闘争のうねりのなかに位置づけつつ、いかに革命をなしとげていくのか？」ということを戦略的に考え、実践していくということである。そこでの「コミュニティ」は、「アメリカの黒人ゲッターというローカルな場所をダイレクトにグローバルな次元へと接続させるための装置」であり、「アメリカ一国に限定されていた闘争を国際的に開くための媒介」でもある。このようにブラックパンサーにおける「コミュニティ」の「自律」と「防御」は、「主権」や「ナショナリズム」（「民族主義」）からの「離脱」と不可分に遂行される、非主権的で横断性を有する「民衆的防御」であった。

小説「石橋」は、こうしたブラックパンサーの徹底した「自律」を媒介に、路地（被差別部落）の「解放」たる「開発」の限界をこそ浮かび上がらせる。ブラックパンサーの「自律」を基盤とした「解放」に対照したとき、路地（被差別部落）の「開発」という形の「解放」は、「自律」の脆弱さ、非主権的な抵抗の線の希薄さなどをあらわとする。路地の「解放」は、ブラックパンサーのそれに比して、より国家主権の内部に絡め取られ、さらには資本の包囲網に包摂されてしまっている<sup>xvi</sup>。

---

<sup>xvi</sup> 国家主権の内部に絡め取られ、さらには資本の包囲網へと包摂されること。それは、友常勉が言うところ（労働力化）〈国民化〉とも重なるものだろう。「永統革命」としての戦後の部落解放運動の可能性と不可能性、「同和行政」の達成と限界をめぐっては、同時代も含め今日に至るまで、数多くの議論や検討が行われている。その中で、近年、友常勉が光をあてるのは、戦後の部落解放運動／「同和行政」が有する〈労働力化〉＝〈国民化〉への捕縛という面からの可否である。友常によれば、「同和行政による住環境整備と仕事保障は、部落出身者を市民的自由と平等を原理とする市民社会へと包摂することを意味した。この市民的自由と平等は労働力商品の自由で平

おそらく、それゆえであろう。小説「石橋」において、小説家の「私」(中上)にとって、「路地の者らと同じように家族を大事にし、白人からは眉をしかめられるようにすげししくったり、騒いだり、毎日がカーニバルかサーカス小屋の中のような事件であふれている」「チカノ居住区」や、「一度訪れたジブシー部落」のほうが「新宮の町」、すなわち、路地の外より「分かりよ」と言う。そして、「私」(中上)は、解体されゆく路地を映像で記録する際、「インディアンの血が四分の一ほど入ったフランス系の混血で」「プアホワイトに属する環境と居住区で育った」「クリント」に「私」の代役を務めさせようともする。こうした小説家の言葉において、ブラックパンサーの「黒人ゲッター」と同じく、路地というローカルな場所は、グローバルな次元へと接続される。ここに見られるのは、「主権」や「ナショナリズム」(「民族主義」)を越える非主権的かつ横断的な「民衆的防御」をこそ希求する小説家の文体だと言えよう。

ブラックパンサーは、暴力が「主権的(超越的)な線に捕獲され、民衆的基盤を離れ、空疎なヒロイズムが支える攻撃的な武力行使にエスカレートする危うさ」を回避するために、「警察との直接的な暴力的対峙を基軸にした攻勢的革命主義」を退け、「コミュニティの防御」へと傾斜し、以後、遍在化する資本の網の目に抗するべく、「横断的な志向」を強めていった。言わば、それは、「炎」——「主権」への志向性を孕む「革命的攻勢」の「炎」から、「橋」——「コミュニティ」の「自律」と「防御」を基盤に主権や民族主義の超克をめざす横断的企てという「橋」への転回だと言える。小説「石橋」は、まさに、こうしたブラックパンサーの企てを媒介に、その重点を、「炎」(対抗暴力)から、此方と彼方を結ぶ「橋」(媒介と横断)へと移行させるのだった。

小説「石橋」は、そのタイトルにあるように謡曲の「石橋」を下敷きとする。その引用と変奏を媒介に小説が示しているのは、世阿弥の芸能が開いた政治文化の地平への挑戦である<sup>xvii</sup>。すなわち、小説「石橋」は、文化の政治学/性一

---

等な商品交換を基本条件とする」。「規律化・規範化としての〈労働力化〉は国民国家においては〈国民化〉を意味する」。「〈労働力化〉は死んだ労働＝資本による生きた労働の支配であり、主体の多様性を賃労働のもとで抽象化する」。「同和行政が部落民を行政施策に委ねるかぎり、部落民の個性性は抽象化・数量化される」。ゆえに「住環境整備や仕事保障が、被差別部落を規律化し、「不適格」をつくりだし、逆に施策からの排除をもたらすのであれば、この〈不利益〉に対して再び闘争が組織されなければならない」のだ、と。(友常前掲書 五十五頁)

<sup>xvii</sup> 「謡曲「石橋」は、あまり手の込んでいないつくりのせいで漢詩を能くした大江定基つまり寂昭法師が今石橋を眼にして思わず声を吞んで、立ちすくんでいる危かしさが腹の底に伝わる」。「新宮にいて新宮のことを考えると誇大妄想じみて来て、新宮の者らがそれをこそ持っている伝統的な文化が実は賤者のもの、それあの後裔が寄り集まって生きている路地のものであり、ひいては

政治と文化の構造、そしてその枢軸にある天皇制を問題化し、前近代から続く日本の被差別部落をめぐる固有の「解放」の問題を追究する。小説「石橋」で、中上が、日本の被差別部落をめぐる特殊な文脈や、個別具体的場所や記憶の問題を手放さなかったことは、ここで確認しておくべきだろう。

同時に、ここでの小説家は、路地／被差別部落を、植民地や第三世界と結びつける。小説は、路地／被差別部落を世界史的な視野で意味付け、思考し、ファノン、ブラックパンサー等を媒介に、路地／被差別部落の「解放」を、世界的な「解放」の動きに連ね、そして、それを鏡に問い直そうとするのである。言わば、路地を世界中のさまざまな路地と切りながらつなげる想像力。そこに読み取るべきは、幾重もの媒介行為を通じて、「解放」の理想を、ひたすらに、飽くことがなく追いつける小説家の夢である。

### 3、自分を自分の主人にすること——「内向する暴力」と路地

小説「石橋」は、ファノンを、そしてブラックパンサーを媒介する。この媒介行為には、また「主権」や「ナショナリズム」（「民族主義」）など、主体の暴力をめぐる難問に対するスタンスを見出すことができるだろう。「独立」は、あらゆる植民地／第三世界の問題をみるまに解決できる魔法の杖ではない。「独立」した国や地域は、継続する植民地主義的構造を、いかに断ち切るのか、という切実な課題に、しばしば直面することとなった。くわえて厄介なのは、「独立」が不可避的に伴う「主権」や「ナショナリズム」（「民族主義」）が孕む暴力の問題である。「独立」には、常に「主権」と「ナショナリズム」（「民族主義」）が包含される。植民地化され、従属化されていた地域や人民が、「独立」というかたちで主体化したとき、「主権」と「ナショナリズム」（「民族主義」）が孕む暴力——主体の暴力と、いかにして向き合い、いかなる折り合いをつけるのか。ここにこそ、脱植民地化の最大の難問のひとつがあると言えるだろう。こうした主体の暴力を政治的思想的課題とし、従属を拒みながらも、あえて「独立」というかたちを、思想的にも実践的にも選択しない方法を模索する国や地域も存在する。しかし、かりに「独立」を選択しない場合でも、解放運動が、この問題を避けて通ることは難しいと言わざるを得ないだろう。周縁的な存在を抑圧し

---

私の血の中に流れこんでいるものであると考え、私が終身かけて破壊しなくてはならないのは世阿弥の芸能の地平だと思いはじめる」。中上と世阿弥をめぐる問題系については別稿を記したいが、ここでは、世阿弥の「夢」が、ファノンの夢に媒介されつつ、文化の政治学／性—政治と文化の構造、そしてその枢軸にある天皇制の構造が動揺させられている。

少数者を捨象することになる多数者による表象代表行為という主体の暴力。あるいは、自己同一性の追求が他者の排除へと至る「ナショナリズム」（「民族主義」）の暴力。いかなる解放運動にも、それらの暴力は、影のようについてまわる。

「独立」をめぐるファノンの夢の言葉には、これら「主権」と「ナショナリズム」（「民族主義」）が孕む暴力——主体の暴力をめぐる難問への直接的な回答は見受けられない。宗主国に対抗し「独立」を目指したファノンにおいて、最大の課題とは、植民地主義との「敵対性」そのものにあり、「独立」については、「市民」（＝人民）中心の国家樹立という視座をわずかに提示するだけである。だが、アルジェリア独立後の世界を生き、また日本社会で路地（被差別部落）の「解放」を思想実践しようとしている中上には、この難問へのなんなりかの回答が必須であったと思われる。この「主権」と「ナショナリズム」（「民族主義」）が孕む暴力——主体の暴力。それに対する、ひとつの回答を、小説「石橋」は、ブラックパンサーを媒介に導き出そうとしたと言えよう。

この点で、小説「石橋」は、ファノンを離れ、ブラックパンサーへと近づいていくことになる。とはいえ、小説「石橋」の中上は、ファノンから完全に離陸してしまっただけではない。路地の暴力を考えるにあたって、ファノンは、いまだ重要な媒介として存在し続けた。たとえば、次のような場面に展開されるのは、路地の精神分析ともいえるべき、ファノンの身振りだと言える。

例の如く腹の中で酒がたゆたうほどに飲み、元々何に関しても熱しすぎるたちがわざわざいして当世の小説家風に口当りのいい話をしてあげばよいのに、明らかに物知らずと分かる連中相手に、ブルーノートがどうの、フリージャズがどうの、と議論し、右の耳で新宮の若衆の話をうんうんとうなずき、左耳で阿呆ぬかせと軽蔑し、そのうち殴ってやろうか、と思いはじめる。まだ小児の世界にいて人とじゃれあって暮らしたいのか、悟りが足りないのだが、いつぞやそうやっていて、決して腹を立てていたわけではないのに、金切り声で物を言われ、自動的に手が出て女を殴り前歯を二本折ってしまい、検察庁まで行って勘弁してもらったことがあった。／フリージャズの話からジャズの発生する場所という話になり路地こそフリージャズによく似合うと私が言いだし、今、山を切り崩している場所でヤマシタ・ヨースケならジャズを演奏できるというと、ヤマシタ・ヨースケは理解できるが何故路地なのか理解出来ないと言い、新宮の若衆は、路地に



こだわるのは私の劣等感ではないのかと言う<sup>xviii</sup>。

この場面には、二つの出来事が、聯合する記憶として溶け合わされている。この二つの記憶を、ある意図をもって縫い合わせる小説の言葉には、精神分析的な働きが潜在するだろう。

路地出身の小説家である「私」は、いま、路地の外の者である新宮の若衆と酒を飲み交わしている。やがて「フリージャズの話からジャズの発生する場所という話になり」、「私」は「路地こそフリージャズによく似合う」と言い放つ。しかしながら、路地の外の者である新宮の若衆は、「何故路地なのか理解出来ない」と反駁する。さらに、新宮の若衆は、「私」が「路地にこだわるのは」「私の劣等感ではないのか」とすら付け加える。「私」は、「右の耳で新宮の若衆の話をうんうんとうなずき、左耳で阿呆ぬかせと軽蔑し、そのうち殴ってやろうか、と思いはじめる」。このとき、「私」を襲うのは、暴力への衝動で、それは、発動の一步手前にまで膨れ上がっている。この現在の暴力衝動は、「私」に、過去の出来事を覚えず想起させる。思い起こすのは、今と同じく、やはり路地の外の新宮の酒を飲んでいた「いつぞや」の記憶である。そのときも、「決して腹を立てていたわけではないのに」、「私」は「自動的に手が出て女を殴り前歯を二本折ってしまい、検察庁まで行って勘弁してもらった」のだった。このように、過去と現在の聯合によって、暴力をめぐる記憶の物語が形成される。

ここで問われているのは、フランツ・ファノンが言うところの「内向する暴力」の問題だと言える<sup>xix</sup>。

カリブ海の仏領マルティニークに生まれ、フランスの植民地であったアルジェリアの独立運動に自らを投機したフランツ・ファノン。「黒い皮膚」を持つ黒人、

---

<sup>xviii</sup> 「石橋」、二七三～二七四頁。

<sup>xix</sup> フランツ・ファノン『地に呪われたる者』（みすず書房、一九六九年）には、次のようにある。「植民地化された世界は、二つにたきられた世界だ。その分割線、国境は、兵營と駐在所によって示される」。「資本主義国においては、被搾取者と権力のあいだに無数の道徳の教師たち、助言者たち、「道を迷わせる者たち」が入り込む。これに反して植民地では、憲兵と兵隊が常にすぐ目の前に姿を見せ、しばしば直接に介入して、原住民との接触を維持し、銃床とナパームを用いて、動いてはならぬと命令するのである」。「現地人が何より先に学ぶのは、自分の場所にとどまること、境界をこえてはならぬということだ。だからこそ現地人の夢は筋肉の夢、行動の夢、攻撃的な夢となる。私は跳躍し、泳ぎ、つっ走り、よじ上ることを夢見る。高らかに笑ひ、ひとまたぎに大河をこえ、多数の自動車に追跡されてもけっしてつかまらぬことを夢見る。植民地時代であっても、原住民は夜の9時から朝の6時まで、自己を解放することをやめはしないのだ」（二四～二五頁）。しかし「己の筋肉のあいだに沈潜するこの攻撃性を、原住民はまずその同胞に向かって発揮する」（二四～二五頁）。

ファノン、精神分析医であり、また、革命家であった。植民地に生まれて、そして、植民地の独立運動に深く関わったファノンとは、思想家として、あるいは、精神分析医として、植民地状況におかれた人々のあり方を、誰よりも身近で、親身になって見つめ続けてきた者の一人だと言える。

植民地状況におかれた人々と触れる中で、ファノンが否応無しに気づかされたのは、ある一つの事実である。それは、そこでの人々が非常に屈折した形で暴力を用いてしまうという事実であった。植民地で生まれた人は、常に、支配者の暴力に囲まれている。そうした暴力にさらされている人間は、暴力を、外に向けることはできない。なぜなら、それを不可能とするに十分な、強い圧迫が常に外から自分に向けられているからである。では、その本来、外へ向かうべき暴力は、一体、どこへ向かうのか。それは、内側、すなわち自分たち自身である。暴力にさらされている人間は、えてして強烈な自己否定に捉われてしまいがちである。外へ向かうことができない暴力は、そのような、けして肯定することができない自分自身、あるいは、自分の身内、仲間や身近にいる人たちなど、内側へと向かうのだ。外からの暴力に晒され、暴力を外へ向けることが出来ない状況の中で、自分や、自分に近い人たちへ、内へ内へと暴力が向う。これが、ファノンが言うところの「内向する暴力」であった。

「石橋」で、「路地」(被差別部落)出身の「私」とは、「新宮の若衆」=路地の外の者に「路地」の「劣等感」を指摘される。肯定できない自己を抱えた「路地」出身の「私」は、身近な女に暴力を振るい、傷つけてしまう。この「私」とは、まさに、ファノンのいう「内向する暴力」に囚われている、と言えるだろう。ここでの女とは、力を持たない弱者であり、それゆえ、さまざまな矛盾を抱えた儂い者たる女である。

中上のテキストには、数々の禍々しい暴力が刻印されている。『熊野集』にも、「妻」に暴力を振るう「夫」、酒に酔って「女」を殴る「小説家」として、生身の作家・中上健次を思わせる小説家である「私」が登場する。「家庭」の中で、新宮の街で、「女」たちに、不条理な暴力を振るう「男」。ドメスティック・バイオレンスやレイプとして、眉を顰められ咎められるもするこれらの暴力は、日本の私小説的伝統の中で「文士」がふるう「無頼」の暴力にも近似する。しかしながら、それらは、路地がおかれ続けてきた構造的暴力との関係の中で読み取られるべき「内向する暴力」だと言えるのだ。

路地の者たちに「内向する暴力」を強いる諸力——遍在化する暴力とは、植民者に類する他者のまなざしであり、その他者による言葉、すなわち言説の暴

力だと言える。「私」は「路地と対になった新宮という町ががまんならない」。右で「路地こそフリーズによく似合う」という「私」の言葉は、「何故路地なのか理解出来ない」と、「新宮の若衆」の言葉によって否定されている。ここに見ることができるのは、エドワード・サイード言う「オリエンタリズム」の問題である。その著『オリエンタリズム』の中で、サイードは、東洋に対する西洋の植民地主義と文化的支配＝言説との不可分な関わりを示している。「オリエンタリズム」とは、オリентという「心象地理」——すなわち「西洋人」の頭の中で考えられたイメージを、他者の住む異空間（＝オリент）として表象する行為であった。「オリエンタリズムとは、地政学的知識を、美学的、学術的、経済学的、社会学的、歴史的、文献学的テキストに配分することである。またオリエンタリズムとは、（世界を東洋と西洋という不均等な二つから成るものに仕立てあげる）地理的な基本的区分であるだけでなく、一連の「関心」、すなわち学問的発見、文献学的再構成、心理学的分析、地誌や社会誌の記述などを媒介としてつくり出され、また維持されているような「関心」を精緻なものにすることもである。さらにまた、オリエンタリズムとは、我々の世界と異なっていることが一目瞭然であるような（あるいは我々の世界にかわりうる新しい）世界を理解し、場合によっては支配し、操縦し、統合しようとさえする一定の意志または目的意識——を表現するよりはむしろ——そのものである。なによりも、オリエンタリズムとは言説である」<sup>xx</sup>

ここで言われる「オリエンタリズム」と同様な事態を、右のエピソードには見ることができるだろう。「どこの国でも、町なり村なりが存在して、その町や村が産みだし、さらに町が町である事、村が村である事を支えるのがゲットウでありスラムであり路地であるが、ニューヨークのゲットウがニューヨークと対の位置になるように、私の路地も新宮と対の位置にある」。新宮の者たち、すなわち路地の外の者たちが描く、路地をめぐる「心理地図」において、路地（被差別部落）という異空間は、文化を欠いた忌むべき恥部、恥ずべき暗部として想像され表象され支配されている。このように路地を異空間としてまなざし、表象する「オリエンタリズム」と同質の言説の、そして文化の支配。ジャズと

---

<sup>xx</sup> エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』（今沢紀子訳 平凡社 一九八六年）十二～十三頁

W. Said, Edward (1978). *Orientalism* (Hardcover ed.). Pantheon Books.

W. Said, Edward (August 2003). *Orientalism: Western Conceptions of the Orient* (Paperback ed.). Penguin Classics.

いう文化の磁場として路地を語る「私」の言葉を否定しつつ、新宮の若衆の言葉は、その典型である。こうした言説の、文化の支配が、路地の者たちに、「内向する暴力」を生じさせるのだった。

中上の記す小説とは、この他者の暴力から、自らを解放するための言葉であったと言える。そうであればこそ、『熊野集』の小説家は、忌むべき恥部、恥ずべき暗部とされる路地（被差別部落）こそが文化の磁場であった、歴史の「リアリズム」を、浮上させようとするのだろう。「新宮という町は単なる交通の不便な、中心から遅れた町だがそれに対して位置された路地はこと文化・芸能・芸術に限って世界中のあそこにもここにもある磁場の一つだ」<sup>xxi</sup>。「二十世紀の思想のほとんどが、迫害されたユダヤ人から生れ、古典音楽をのぞく音楽、ジャズ、ロック、タンゴ、ファド、フラメンコ、サンバ、サルサ、レゲエと全て被差別部落と言ってよいところから生まれている」<sup>xxii</sup>。だから、「新宮の歴史を学び、門弟三千人の文豪佐藤春夫を産み出した新宮の文化史にとって人がそこの行き来を門で仕切り、松の内に町中に入りこんだ者らを追いかけ廻したとオバラが語る路地から小説家が生れるなどという事は青天のへきれきに値する事だった。だが私は当然の事だと思っている」<sup>xxiii</sup>。

本橋哲也が言うように、ファノンの精神分析とは、「黒い皮膚に囚われた自らの身体を突き刺す白人たちのまなざしに抗い、自分が自分の主人であるような関係を作り直そう」とする行為であった<sup>xxiv</sup>。他者によってまなざされ表象されてきた自己を、自分自身でまなざし自らの言葉で表象するための言説の、文化の争闘。中上は、そのような意味においてファノンの精神分析を見出した。そして、ファノンがそうであったように、中上もまた、路地（被差別部落）という磁場で他者の「まなざしに抗い、自分が自分の主人であるような関係を作り直そう」としたのだった。自らをも捕縛する「内向する暴力」から解き放たれ、「自分が自分の主人であるような関係を作り直」するために——。おそらく、そのために、中上には、文学の言葉が必要であり、自らを「解放」するために、

---

<sup>xxi</sup> 「石橋」、二七五頁。

<sup>xxii</sup> 「生のままの子ら」初出『解放教育』一九八二年八月一日、『エッセイ集 青春・ボーダー篇』四三七頁。

<sup>xxiii</sup> 「石橋」、二七五頁。

<sup>xxiv</sup> 本橋哲也『ポストコロニアリズム』（岩波新書、二〇〇五年）、六十頁。本橋によれば、「ファノンにとっての実践とは、武器や弾薬を必要とする占領軍に対する戦闘であると同時に、闘いと抵抗のなから民族文化を創造する試みでもあった。」（七九頁）と述べている。それと同じく、中上もまた「文化の闘争」を仕掛けていった。

中上は、文学の言葉を書き続けた。そのような、一人の小説家の個人的な、しかし普遍性を有する、小説というかたちの言説の、文化の闘争において、路地は、「世界中のあそこにもここにもある磁場」へと開かれゆくのであった。

#### 附記1

中上健次の文学には、人種民族差別及び、社会的差別に関わる用語や表現が使用されている場合があるが、中上文学が差別構造の矛盾を本質的なテーマにおいたことを重視し、全て、原文のまま引用している。中上健次の小説テキスト、および『紀州——木の国・根の国物語』は、『中上健次全集』第一巻～第十五巻（集英社、一九九五～九六年）に拠っている。引用の際は、全集の巻数と頁数のみ記した。また、その他のテキストについては、『中上健次エッセイ撰集』青春ボーダー篇（恒文社21、二〇〇一年）・文学芸能篇（恒文社21、二〇〇二年）に依り、引用の際は、『エッセイ撰集 文学芸能篇』もしくは、『エッセイ撰集 青春ボーダー篇』と略記したうえで、頁数を記した。

#### 附記2

本研究は、日本学術振興会・科学研究費助成事業「現代文学における「地域」と「開発」をめぐる系譜学的研究」〔若手研究（B）研究課題番号：26870514（H26～H28）〕による研究成果の一部である。